

# 音楽によるコミュニケーションの必要性 (I)

— 人間の成長過程の中で —

三 輪 宣 彦

## The Necessity of Communication through Music in the Growth Process of Human Beings (I)

Nobuhiko MIWA

**Abstract:** Music has a communicative power in human society that transcends language. This is particularly true for the nurturer (mother) and child, or for children when they are together, for if music is parcel to their development, so also will there be a sense of social responsibility as well as a rich emotional life. In today's competitive society where there has been a weakening of societal bonds such as the nuclear family, there has also been a diminishing of the bonds between people. One worries about the emotional education of our children.

This small paper looks at the origins of music, and discusses the special characteristics of music in nourishing communication, as well as its role as a medium of enriching human interaction.

はじめに

“There would be no music and no need for it if it were possible to communicate verbally that which is easily communicated musically”

E.T.Gaston の上記の言葉を捉えて、日野原は「言葉が人々の心と心をすべてコミュニケーションできるのであれば、人間の歴史の中に音楽は生じなかつたろう。」<sup>1)</sup>と人間社会における音楽の重要性を指摘している。

これは音楽が人間の歴史の中に何故生じたかを問いかけ、人間社会の中で言語を超えた音楽の持つコミュニケーションの力の有効性を示唆するものである。それはまた音楽の存在する意味についての問いかけでもある。

人と人のコミュニケーションの希薄さは今日の社会問題の大きな課題である。それが皮肉にも通信網の発達、競争社会の組織化や核家族化に伴う社会の連携の荒廃、また今日の教育環境のあり方に要因があると考えられている。殊に、家族内に起こるトラブルや教育現場に関わる問題がメディアから連日のように知らされる。身近な近親者や教育の場におけるこうしたトラブルは、前に見たようにコミュニケーションの希薄さに一要因を置いている。この要因が単なる一過性の社会的問題ではなく、子どもの成長の中で徐々にしかも深く関わっていくものであるとするなら、その要因を追及し、希薄さを解消する手段を打たなければならない。

音楽が言葉より優れたコミュニケーションの手段であるなら、その音楽の特性を捉えて、先に挙げた人と人との豊かな人間関係に生かしていくことは極めて重要なことである。

この小論は音楽が何故人間社会の中に生じたかを考え、音楽の持つコミュニケーションの力と感性を育む特性を述べ、それが人間関係にどのような影響を及ぼすかを考える。即ち、この音楽の持つ特性が子どもの感受性と社会性に深く関わりと同時に、社会の中で、特に今日の問題とされる近親の間に於けるコミュニケーションの希薄さの解決の手段になることを論述する。

## 1. 人間社会における音楽の起源と特質

音楽の起源についてはまだ共通の理解は得られていない。それは音楽が時間的な制約を持つものであり、太古には今日のようにそれを留めておく手段がなかったからである。勿論、古代の遺跡や出土品からは僅かに社会の中でどのように用いられていたか、またどのような音具が使われていたかを知ることができる。しかし、その中から音楽が本来持つ旋律やリズムについて確かなものは得られない。ただ、生物学や文化人類学、民族音楽学の立場から種々の学説は出されている。例えば「言語に感情が加わり旋律化していった言語起源説、内面的な感情が声に抑揚を付けていった感情起源説、異性に対する感情を声によって表現した恋愛起源説、遠くにいるものに音や声をコミュニケーションや伝達手段に用いた通信起源説。」<sup>2)</sup> などである。こうした種々の起源説に対し、20世紀に入り比較音楽学の立場からは Curt・Sachs は「言葉に感情が入って抑揚を持つ言語起源的な学説と、感情的な声旋律化していく感情起源的な学説の両者の様式を持ち合わせた、音楽の起源に近いものを自然民族の調査の中で捉えており、これを旋律起源説。」<sup>3)</sup> としている。Curt・Sachs のこの説は複数の自然民族の調査から得たものであり説得力がある。この起源説は音楽が人間の感情の昂まり、また声や音による意志の伝達やコミュニケーションの手段として生み出され、発展してきたと推測されるものである。先にも見たように、音楽の起源については確たる共通理解は得られていないが、人間の声を伴う感情の昂ぶりや意志の伝達と深い関わりがあったと捉えることができる。「人間が一人または小グループでしかなかった頃は、歌うことよりも叫び声が行先していたと考えられ、よく透る声を出して相手呼び寄せたり、威嚇したり、自分の存在を知らせたに違いない」<sup>4)</sup> 地球上のどの種族においても太古の時代には、声によるコミュニケーションが中心であり、それが感情の昂ぶりと共に旋律線を描いていったという考え方は的を得ている。その旋律線はプリミティブなものではあるが歌うという行為に繋がるものであった。それは次第に集落を作るに従い、社会の中で確立されて行くことになる。「その歌も常に生活と直結しており、旋律は言葉の抑揚に忠実で身体の動きを伴い、簡単な構造の音具で伴奏されることもあった」<sup>5)</sup> 感情の昂ぶりを伴う声と身体の表現は生活に直結した喜びや悲しみを伴うまつりごとや、民族間の戦や狩猟の前の士気の鼓舞に極めて重要な役割を担ってきた。太古の人々の歌には内面的な感情の表現と身体の動きが密接な繋がりをもっていたことは「今日も自然民族の中にそのような行為を見ることができる」<sup>6)</sup> ことによって推測できる。

「個体発生は系統発生を辿る」という説が人類の進化の諸説の一つとして議論されて久しいが、音楽の発展を推測する中でも、その類似性を捉えて音楽の社会性について推し進める考え方がある。つまり「固体は常にその種族の発達過程を繰り返すものであり、子どもの世界にはその民族の成長過程が太古の時代の形で反映し、彼らの生活の中(遊びの中)の言葉遊び、ゴロ合わせ、遊戯歌の単純な旋律やリズムの中に表れる」<sup>7)</sup> とするものである。即ち、子どもの音楽的成長は感情表現としての叫び声や泣き声から始まり、次第に気分の良いときには旋律的な線を描く稚拙なメロディーを口ずさみ、成長するに従い身体全体を使って表現を試みる。子どもの中には太古の人々が辿ってきた歌うという行為の発達過程を見ることができる。それは歌が単独で表れる

のではなく、身体の動きや言葉が統合されて表れると考えられるからである。人間が成長していく過程の中で、感情を伴う音楽がどのように人間と関わっていくのかを系統発生的な方向性からも視点を据え、人間にとって音楽とは何かを考えて行くべきである。

## 2. 乳幼児期の発達過程と歌う行為による人間関係

### 1) 子守唄とマザーリーズ

新生児が初めて出会う歌は母親の子守唄だと一般によく言われる。その旋律はそれぞれの民族によって使用する言語や文化によって多様な歌に接することができる。この言語と旋律、文化と歌の関わりは子守唄の性格に大いに影響を与えるが、そのことは後述する。しかし、子守唄の性格上、躍動的で複雑なリズムやメロディーは見ることができない。加えて母親が子どもに歌って聞かせるテンポが民族を超えて共通しており、そのテンポは通常、一分間に70拍から80拍の速度であり、これは胎児が母親の胎内の音環境から受ける影響に強く関係している。

人間は出産三カ月前に聴覚の機能を有している。それは「母親の腹部に実験的に与えられる振動や音に対して、胎児自身の心拍数に変化が生じたり、胎動したり、腹部を蹴るなどの直接的な反応を示すからだといわれている」。<sup>8)</sup> 体外からの音は通常、母親の身体や子宮内の羊水によって吸収されるので、その音量は当然減衰する。これに対して母親の心拍音と胎内に注ぐ一定拍を保つ血流音は絶えず胎児の新しく機能し始めた聴覚に達しており、またその振動は子宮から直接胎児に拍節的なリズムとして刺激を与えていると考えられている。この子宮内の音環境の中で過ごした胎児が、出生後に心拍音や血流音の規則的なリズムに接することによって精神的な安定を与えられるという考え方は今日では一般的である。

一方、母親の声帯で作られられる声は身体の内部を通して胎児の聴覚に達し、彼らの記憶に保存され、母親の肉声を識別する能力を持つと考えられている。胎児は胎内で成長するに従い、母親の腹壁に羊水を通してではあるが直接耳をつけることになるので外部の音に対しても聞き取ることは可能である。しかし、先に見たように音声で最も効率よく胎児に届く声は声帯を通して体内から達する母親の声である。母親の心拍音と子宮内に酸素や栄養素を送り込むために胎盤を通して聞こえてくる血流音と音声とが彼らにとって最も聞きなれた音であり、リズムなのである。こうした胎内の音環境が常に平静に保たれることが胎児の情緒を安定させると考えることができる。

この章の初めに子守唄のテンポが民族や時代を超えて普遍的であることを述べたが、それは先に見たように母親の体内に流れる血流音と心拍音のテンポと関連しているからである。子守唄が心拍音の速度によって歌われることによって、その有効性や意義が論じられるようになったのは近年になってからである。鹿取によると「母親は一般に赤ん坊の頭を左側にして抱く傾向があるが、それは母親の心臓の鼓動によって赤ん坊の情緒が安定するからである。」<sup>9)</sup> としている。従って、子どもを抱き、子守唄を歌って聞かせるときにはその歌のテンポに合わせて軽くゆすったり、振動を与えたりすると効果は増す。この心拍音と子守唄のテンポの関連は生理学的に充分説得性を持っている。

以上のような子守唄の精神的な安定の効果は、永い人間の子育ての営みの中で母親が感覚的に習得して行ったものであろう。しかし、子守唄はこうしたテンポの有効性以上に母子のメンタル的な面で重要性が考えられる。

まだ話すことのできない新生児や乳児に母親が語りかける言葉を「マザーリーズ“motherese”」<sup>10)</sup> という。これは1970年代にアメリカで生まれた言葉で「母親語」という意味の造語である。このマザーリーズは語りかけるときにイントネーションを大きく分かりやすくし、通常よりトーンも

高くして簡単な言葉をゆっくりと繰り返すという特性がある。赤ん坊の反応を促すために抑揚の幅を広くし、歌うように表現されることが特徴がある。「これは子守唄と同じように旋律に対しての原初体験として捉えることが出来る。」<sup>11)</sup> そこには言葉と旋律の密接な繋がりがあり、母子の望ましい関係に重要な働きをしている。この抑揚を持った旋律的な言葉は母親の内面の表出であり、母親の優しさや温かさを生まれたばかりの幼子が感受し、人間として安定した情緒や感情を培っていく。先に見た子守唄が心拍音のテンポとの関係よりも、むしろ、メンタル的な関係に重要性があると指摘するのは「マザーリーズ」を例として捉えることが出来よう。子どもに寄り添い歌いかける母親と、その歌声を耳にして眠りにつく子どもの間には精神的に豊かな母子相互の関係と、幼子が人間として生きていくための最も大切な愛の基盤が備えられているのである。

以上のような重要なポイントと同時に、子守唄やマザーリーズは母子の相互関係の中で母国語の言語リズム素による初期刺激付けという働きがある。母親はマザーリーズや子守唄を通しての幼子とのコミュニケーションのなかで、本能的欲求や知能をすでに備えている人格として扱うことが肝要である。乳児がそれに対して何かを伝えようとする意思が相手に分かる仕草をするからである。D.O.Hebbはこのことに関して「乳児のある機能が実際に働き始めるよりもかなり前の段階、まさに出生のその瞬間から刺激付けが必要である。」<sup>12)</sup>と述べている。この刺激付けによって乳児の機能は正常な発達をみるのである。母子相互作用は情緒や感情の育成と同時に人間としてのコミュニケーションの基盤を築く極めて重要な働きかけと考えられる。

## 2) 乳児と遊ばせ歌

こうして乳児は養育者、一般的には母親と一体となった関係を保ちながら成長発達を遂げていく。新生児段階に見られた「人指向性」は次第に分化して、特定の人物に対しての反応が強くなる。乳児と母親の間には非言語的な身振り、表情、音声を通じた親密なやり取りが交わされる。この原初的なコミュニケーションは前に見たように母子相互作用と呼ばれ、近年、特に発達初期における重要性が叫ばれている。乳児はこの相互作用のもとに安定した情緒を培い、母親への愛着を形成する。この愛着形成が人間の精神的発達に重要な役割を示すことになる。逆に、「この愛着を形成する対象者から長期間引き離されると、後の精神的発達に深刻な影響を与える。」<sup>13)</sup>とまで言われている。

母親が乳児の手を取ったり、あやしたり、頭をなでたり、膝に乗せてゆすったり、音声や言葉や身振りによるリズムカルな語りかけをもって乳児に接するとき、その相互作用による母親への愛着は確実に形成されていく。こうしたリズムカルな身振りを伴う語りかけは「遊ばせ歌」と呼ばれ、乳児の成長に必要な多様な要素を含んでいる。「遊ばせ歌」は言葉のリズムや短い旋律と身体の動きが一体化して乳児を楽しませる。母親の表情を見ながら彼らは一緒に身体を揺すり、幾度も繰り返しそのリズム遊びを要求し、積極的に関わりを持とうとする。それは、目や指や身体を通して感じられる鼓動と耳から入るリズムカルな語りかけ、つまり、乳児が母親の音楽的行為の相手になり、応答できる喜びが積極的な母親への働きかけに結びついて行くのである。一方、乳児に遊ばせ歌を歌って聞かせる母親には内面的な心の調和と安定があり、そういう心の状態は必然的に母親の身体の動きを柔らかくし、乳児を見つめる目も優しく柔和になる。この時の母子の相互作用における精神状態は非常に安定しており、愛着が強く形成される。また言葉のリズムと旋律を自然な形で習得することによって言語の発達を引き出し、コミュニケーション能力を培うことになる。このように遊ばせ歌による乳児期の音楽的行為は内面的な心の発達と言葉の発達に接近した発想の中で総合的に捉えていくことが必要である。乳児にとって遊ばせ歌を通してのコミュニケーションは母親との深い情緒的な繋がりを意味すると同時に、彼らの中に表現力を植

え付け、豊かな人間関係への基盤を備える。

近年、子どもの養育のために製作された「遊び歌」に類するCDやカセットテープが市販され、その活用も少なからず見受けられる。しかし「母子相互の『遊び歌』を通しての人格関係や精神的な繋がりは、メディアなどを通して受け取るものでは代替のできない価値の高いものが含まれている。」<sup>14)</sup> 何故なら音楽的表現は人間の肉声や身体の触れ合いを通して、子どもの心や感情に訴えかけることにより真実意味をなすからである。

### 3) 幼児と遊び歌

幼児期前期になると「大人が発した音声を模倣する能力や言語の意味を理解する能力の発達が認められ、語彙の急激な増加が見られる。」<sup>15)</sup> 象徴機能の発達が見られ、社会性が芽生えてくることにより、養育者との強い繋がりが基盤となって次第に第三者とのコンタクトを持てる時期に入る。こうした発達過程の時期には「唱え文句」や「語呂合わせ」そしてシンプルな遊び歌が養育者との間以外にも、第三者や少数のグループの遊びに適したものとして用いられる。自分と他者を認識しながら一緒に歌ったり、身体を動かしたりしながら、相互に影響し合い、模倣をしながら音楽的関心を育てていくことができるからである。こうした係わり合いの中で、身体の活動が引き出され、また、「多くの音声を出すことによって音の模倣と発声が促され、歌を通しての人間的コミュニケーションの中で精神的に安定した人格が形成されていく」<sup>16)</sup>

「遊ばせ歌」も「遊び歌」も基本的にはあやし言葉や遊びの中で自然発生的に生まれ、母国語によって歌い継がれてきた。これらは伝承遊びとして継承され、「わらべうた」とよばれており、母国語の自然なアクセントやイントネーションと密接な繋がりがあある。子ども達はこの自然な言語に即したリズムや旋律を遊びの中で母親や子ども同士で歌いついで行くのである。「わらべうた」のようなプリミティブな旋律は、概ねペンタトニック（5音音階）によって構成され、拍子やリズムの構造に於いても日本語の拍節的なリズムや農耕民族である日本人が培ってきた歩行リズムの二拍子系の曲に集約される。言語や生活様式は音楽の構成に強い影響を与えるが、旋律に関しては子どもの音程認識力が半音を明確に分ける段階に達していないことや、声帯の生理的発達が未完成なことにも関連して必然的にペンタトニックの旋律が発生すると考えられる。つまり、わらべうたは前に見たように子どもの自発性と自由な遊びの中で、彼らの生活と密接な繋がりを持った歌として自然発生的に生まれ、その楽しさを幾度も体験し、それを他者に伝えようとする積極的な関わり合いの中で確実に自己の表現として蓄積されて行く。また、自由な遊び場において主体的に子ども達が創造し、伝えてきた歌は彼らの生きた表現であり、精神性と強く結びつくものである。心を解放し、主体的に自己表現を獲得していくことは、音楽に対する自然なアプローチであるとともに、心と身体、そして社会性の発達にとって重要なこととして捉えなければならない。

幼児期後期になると、4歳頃から競争意識が芽生え、5歳頃から共同意識が活動の中に見られる。競争意識の表れは、他の子どもとの比較ができるようになったことを意味し、共同意識の芽生えは友達との連携が可能になったことを意味している。「この二つの意識がバランスよく育つと、集団の中で自立と協調の精神的な成長が形成されていく」<sup>17)</sup> また、歌や遊びに喜んで参加し、音楽能力も急速に発達する時期である。歌うことを積極的に楽しみ、独自の歌を創造したり、言葉をかえて歌ったりもする。また、グループで歌うことにも慣れ、動きも活発になり、集中して興味を持続できる時間も長くなる。以上のように、この時期は相互の関わり合いの中で精神的、社会的成長を見るのである。

こうした成長の中にある子ども達が最も好む「遊び歌」は競争意識や共同意識を育み、集団の

中の自己を認識することのできる友達遊びや鬼遊びを伴っている。それは一人一人の子どもが主体的に「歌遊び」に参加し、個と集団を認識しながら遊びの中のルールにそって活動するからである。ルールという一つの社会的制約の中に主体的に関わり、歌いながら追いかけたり、逃げたりする中で競争意識や共同意識が自然な形で育てられていく。また、子どもの遊ぶという特質と歌うというコミュニケーションの行為の中で音楽的表現力の蓄積と社会性の育成が図られる。子どもが無心になり、歌を伴う遊びに没頭しているときは何らかの目的に縛られるものではない。そのような瞬間は創造的なときであり、人間的に豊かな関わりを持つ時であり、主体的に積極的に生きる力を養うときである。心と身体が一体になってぶつかり合う体験は、心に内在する思いや感情を声や身体や言葉を媒体として表現することであり、音楽的発達の源であるとともに、心身の発達において重要な体験なのである。

このような音楽を媒体とした養育者と乳児、また幼児期の子ども達が人間的な交わりの中で満ち足りた思いを抱くのは、音楽が人と人とのコミュニケーションに強く関わっており、社会性の育成を促すと共に、感情の伝達、心から心へ思いを伝えるという音楽の持つ特性に深く関わっているからである。

### 3. 児童期の特性とアンサンブル教育

さて、児童期における音楽の果たす役割は集団での活動の中で重要な位置を占める。

小学校に入学するとクラスの仲間と接触することになり、少人数の遊びが減少し、集団で遊ぶ機会がふえ、社会意識が発達する。この時期は家族よりも仲間からの影響を受けるようになり、グループの一員としての活動が見られる。従って、児童期においては社会生活の拡大による社会性の発達とそれに伴う精神的な発達が著しい特徴として表れる。この時期に社会性と共に、協調性を大きく育て、豊かな人間関係を築く基礎を培い、これからの対人関係による様々な問題に対処できる感情と精神性を養うことが肝要である。「この時期は社会的経験を経ることによって、身体的な直接行動によることよりも、言葉によって感情を表出することの利を悟り、激しい情動から、おだやかで豊かな感受性を培う時である」<sup>18)</sup> 友達との種々の音楽活動における共同作業の中で達成感や感動の共有によって感性が育ち、自己を抑制する力が育つ。彼等が大人になって社会生活を営むとき、人と人との人間関係は避けられないが、この時期の豊かな感情と心の触れ合いの中で築き上げられた人間性が、様々な対人関係の中で自信を持って生きていく力になるのである。

以上のような特性を持った児童期とそれまでの幼児期との大きな相違点の一つに、グループや仲間との関係のあり方が上げられる。「幼児期では『一緒に遊ぶ友達』であったものが、児童期になると『共に学びあう仲間』として大きな意味を持つ存在になる」<sup>19)</sup> 一般的な社会性の発達という面からも、グループにおける活動の意義は重要であり、とりわけ児童期の音楽体験という局面において、グループのもたらす効果は大きい。このことは、音楽の内包する社会性、即ち仲間と共に演奏する喜びと達成感、演奏する者と聴くものが一体化する相互関係や感動の共有と無関係ではない。このような音楽を媒体とした人間関係はグループ演奏によるアンサンブルに最も如実に表れる。アンサンブル教育はこうした社会的意義の他に、感情や心を音によって表現する人間の持つ基本的なコミュニケーション能力の育成に関わるものであり、前述のように、これからの人間関係を豊かに築き上げていくものと考えられている。即ち「音楽を演奏するグループ活動の中で自分の存在意義を実感すると共に、音楽を通して集団の中に自分を委ねる安心感を体験し、音楽を核とする心の動きを共有することが出来る」<sup>20)</sup> こうした共有体験の積み重ねは個と集団を認識し、グループの中の自分の役割りとグループ全体としてのまとまりを把握し、互い

の心的交流を深めていく。

児童期前期は幼児期後期と同じように競争機能や共同機能を育てる「遊び歌」に一層夢中になる時期である。しかし、次第にクラスの中で声をあわせて歌うことに喜びを感じ、共に歌うことの意義を見出すようになる。こうした声によるアンサンブルはユニゾンで歌うことから始まる。このユニゾンからグループごとに少し旋律をずらして歌うカノンに発展させていくことができる。同じ旋律を追いかけて歌うカノンはハーモニー感覚を楽しみながら習得し、協調意識をさらに高める。これは次第に他の子どもと声を合わせてうたうポリフォニーへの導入である。同じ旋律をずらして歌うカノンから、異なったパートを歌ってハーモニーのアンサンブルを楽しむ2部合唱はさらに音程感覚、ハーモニーに対する感受性を高め音楽性を引き出すと共に、互いに旋律をあわせるために自己を主張したり、抑制したりする社会性を育成するものである。この声によるアンサンブルは子どもの精神的、肉体的健康と音楽的な感覚と社会的順応性を備えるために非常に有効な手段である。

児童期後期のアンサンブル教育で最も効果を挙げるものは創作楽器による即興アンサンブルであろう。この時期は社会性や精神性の発達と共に、体験を通して知識を内在させる時期であり、創造性が引き出され、前に見たように共同での作業に自分の存在意義を実感する。こうした児童期の特性を考え、身近な素材により楽器を製作することをアンサンブルの導入とするのである。殊に竹を素材とする楽器は児童期の子ども達にも製作が容易で、しかも柔らかい音色を作り出すことが出来る。竹を素材とする楽器の製作方法についてはこの小論では詳細に述べる紙面は持たないが、マウイマリンバ、トーキングドラム、バンブロック、スリットドラム等は共同で製作でき、音の高低や音色、共鳴を模索しながら音のメカニズムを探求するには最も適した素材と考えられる。また求める音の出た瞬間の感動と喜びは感性を育て、積極的に音楽に関わろうとする気持ちを引き出す。「人間の感性は幼児期、児童期に親しい間柄の人間と共に、どれ程多くの物事に感動した体験を持ったかによって決定する」<sup>21)</sup>とされている。

製作された楽器を使っのアンサンブルは音と音によるコミュニケーションから入り、オスティナートを中心とする、プリミティヴなリズムのアンサンブルからペントニックの旋律に移行していく方法が適当である。

このような創作アンサンブルは音楽が人間社会の中でどのように発展して来たかを子ども達が体験を通して知ることが出来る。即ち、人が音に感動し、音を合わせることや音によるコミュニケーション楽しみ、自分達の音楽を作り上げることに、人が音楽を創造してきた過程の類似性を見るといのである。この時期の子どもは独自の楽器、オリジナルの音楽を彼らのものとして共有することにおいて仲間意識や人間としての感情の触れ合いを大切にしていく。このような過程を子どもが体験を通して捉えることは「音楽というものが、基本的に一人の個人の中だけに留まるものではなく、ちょうど言語と同じように、人間の社会的営みであることを示している。」<sup>22)</sup>ことを知る。そして音楽の人間社会での根本的な意味を捉え、その重要性を認識していくのである。

#### 4. 今日の子どもを取り巻く環境と音楽の必要性

子どもの発達過程を把握し、それに応じた母子や教育の場での対応が叫ばれて久しい。養育者とのアタッチメントやコミュニケーションの不足、また子ども達の発達過程が昨今の社会や環境における急激な変化によってこれまでの発達観とのずれが生じ、学校教育の中での子どもの言動に戸惑う教師の姿も見受けられる。「表情に乏しく、感情や意思の表現がうまくできない幼児が増えている。子どもの欲求に愛情をもってコミュニケートしていなかったり、子どもの思いと母

親の問いかけとの間にずれが生じる、いわゆるディスコミュニケーションが見られる」。<sup>23)</sup> マニユアルどりの子育てや育児に対して熱心に取り組んでいるにもかかわらずこのような悩みを抱える母子が多い。これは一方的な押し付けや、形式的な子育てに対する警告でもある。また、小学生の校内暴力が増加し、その低年齢化に警戒感を強めている。これは「忍耐力やコミュニケーション能力の足りない児童が、自分の気持ちを言葉で表現できず、暴力に走るケースが多い。」<sup>24)</sup>と分析している。こうしたケースを少子化に伴う人間関係の希薄からくるコミュニケーション能力の欠如を第一要因としてあげることが多い。

コミュニケーションの欠如は人間が社会に生きていくための存在意義を問うものに他ならない。何故なら、これは子ども達が関わっていかなければならない社会形成、家族形成、労働によって欠かせないものであり、また、「コミュニケーション能力に関わる安定した情緒の発達と人間関係の育成は攻撃性の抑制を培い、社会に於ける集団形成に必須の能力だからである」。<sup>25)</sup> 人間として生きていくための基盤を築く最も重要な幼児期・児童期のこの社会現象を危惧し、今後の子育て、そして教育のあり方を検討し、健全な人間関係に修復するための研究がなされている。社会や環境の変化の中で少子化による人間関係の希薄さをその要因として挙げてはいるが、学力尊重による精神的孤立やテレビをはじめとするメディアの影響による感受性の荒廃も見逃すわけには行かない。

子どもの感情機能の成長や精神的発達は知的発達と共にバランスよく育つことが重要視されているが、知的発達に比してその発達を的確に掴むことは難しい。しかし、子どもにとって年齢に即した感情機能の発達はその成長過程の中で重要な位置を占めているし、それは情緒や精神的成長に深く結びついていくものである。精神的発達と感情機能の成長は社会の中で安定したコミュニケーションと信頼関係の中で豊かな人間関係を築き上げていく。

さて、音楽を媒体とした人間関係が子どもの精神的成長と感情機能の発達、また対人とのコミュニケーションの能力を築き上げていくのに有効な手段であることを述べ、音楽に関わる子どもの発達過程を「系統発生」に類似するものとして捉えようとした。

音楽が人間社会の中でどのようにして生まれ、発展してきたかは前に見たように、人間の感情や意思を声を媒体とした表現から始まったものと推測できる。従って、社会がある程度構成され、互いにコミュニケーションをもって生活する中から生まれてきたと考えられる。それは人間の感情の表現であり、意思の伝達であり、内面の表出である。プリミティブな旋律には動きが伴い、集団を構成するグループはそれによって互いの親しさを確認しあった。心と心の交流がそこに形成された。仲間意識がそこに介在した。コミュニケーションとしての歌は徐々に統制の取れたものに発展していった。単純な音の構成は次第に豊かな旋律線を描いてきた。集団（社会）の構成は大きく膨らみ声による表現に音具が加えられた。音楽は社会の中でその必要性を確実なものにして行く。

子どもが発達する過程の中の音楽との接近は養育者との関係から子供同士、小グループから、大きな構成の集団へと移行する中で歌に動き（遊び）が伴い、単純な旋律から豊かな旋律へ、モノフォニーからポリフォニーへとアンサンブルは大きな構成へ発展し、音具（楽器）が加えられていく。こうしたプロセスを経て音楽を媒体とする人間関係を築いていくことが子どもにとって自然であり、有効な手段なのである。それでは何故音楽を媒体としたコミュニケーションが人間的な関係を豊かにするのか。

音楽は感情と密接なつながりのあることは前に見たが、それは自然な抑揚とリズムを持っている。人の言葉によるコミュニケーションが抑揚のない平坦なものであれば思いの伝達は半減する。しかし、我々が相手に気持ちを強く訴えるとき自然に言葉に高低がつき、その抑揚の中に感情を



移入することが出来る。言葉よりも強く人間の内面を表現できる手段、それは言葉の自然な抑揚が旋律と化した音楽なのである。「どのコミュニケーションの手段よりも直接人間の心に訴える表現手段は旋律とリズムを持った音楽である。」<sup>26)</sup>と Géza Révész も音楽の起源に関して述べている。「人間の脳は先ず声の感情、抑揚の面に反応するよう構成されているのである」。<sup>27)</sup> ですから太古の人々は言葉より歌声を使って自分の感情を表わし、喜びを分かち合い、悲しみを慰め合った。人間が精神的に豊かに発達していったプロセスが、この歌を媒体としたコミュニケーションの中に内在している。

子どもは自分の感情を十分に表現できる手段を全身を使った抑揚のある声に求める。歌を歌うときの彼らの内面は解き放たれ、自分の思いをその旋律に託して伝えようとする。そうした感情の触れ合いは人間が生きていくための根本的なコミュニケーションの手段であり、言語を超えて直接心に働きかける。音楽はそれを最も優しく、美しく、内面に語りかけることを可能にするものである。それは人間しか培うことの出来ない豊かな情操を育むことに繋がっていく。

### おわりに

安定した情緒は外からの刺激に心を動かされたとき、感動して豊かな感情を発生させ、感性を育む。感性が豊かであることは人間らしい心を持つことに繋がる。人間らしい心は人と正常にコミュニケーションする能力と協調する心、また自己を抑制する力を備える。人間らしい、感性豊かな子どもを育てるために、音楽が果たす役割は大きい。音楽は言語を超越して直接的に人間の心に働きかけ、魂を揺さぶるからである。母から子どもへ、子どもから子どもへ感情豊かな音楽によるコミュニケーションがなされる時、子どもを取り巻く環境と子どもの心に徐々に変化が起きることが期待できる。

### 注

- 1) 日野原重明：音楽の癒しのちから，春秋社，1999，p9
- 2) 久保田慶一：はじめての音楽史，音楽之友社，1998，p8
- 3) Curt・Sachs：福田昌作訳，音楽の源泉，音楽之友社，1970，p202
- 4) Ernst・Haefliger：小椋和子訳，音楽の知識とテクニック，シンフォニア，1994，p9
- 5) 星旭：日本音楽の歴史と観賞，音楽之友社，1971，p5
- 6) Curt・sachs：岸辺成雄訳，音楽之友社，1979，p34
- 7) Carl・Orff：属啓成訳，こどもはリズムに生きる，NHK編，1966，p8
- 8) 鹿取廣人：人間の成長，小学館，1982，p171
- 9) 前掲書8) p171
- 10) 志村洋子：母と子の初めての音楽体験，音楽之友社，1996，p16
- 11) 石澤真紀夫：声―魂を揺さぶるもの，教育芸術社，2003，p100
- 12) 鷺津名津江：わらべうたとナーサリーライム，晩声社，1992，p194
- 13) 今泉信人，南博文：発達心理学，北大路書房，1994，p23
- 14) Forrai・Katalin, Szonyi・Erzebet：羽仁恭子，谷本一之，中川弘一郎共訳，コダーイシステムとは何か，全音楽譜出版社，1976，p17
- 15) 前掲書14) p 123
- 16) Forrai・Katalin：畑玲子訳，音楽の理論と実際，明治図書，1991，p15
- 17) 前掲書14) p38
- 18) 山内光哉：発達心理学上，ナカニシヤ出版，1999，p44

- 19) ヤマハ出版社編：音楽は子どもに何を与えられるか，ヤマハ出版，2004，p112
- 20) 日本音楽教育実践学会編：思春期の発達の特性と音楽教育，2004，p28
- 21) 伊藤英造：音楽の薦め，ヤマハミュージックメディア，2005，p192
- 22) 近藤譲：音楽という謎，春秋社，2004，p15
- 23) 日本経済新聞，1997年4月8日（夕刊）婦人欄に掲載
- 24) 読売新聞他5社，2005年9月23日，第1面，「文部科学省，校内暴力2004年度調査」
- 25) 北田耕也：感情と教育，国土社，1992，p16
- 26) Anthony Storr：佐藤由紀，大沢忠雄，黒川孝文共訳，音楽する精神，白楊社，2001，p26
- 27) 前掲書27) p23